

HAPPY RETIREMENT !

— 思い出すことども —

岸 本 茂 和

(外国語部長)

書いても切りがない。書けば果てもない。だろうという思いがする。

*

私の駒沢生活は、旧第一研究館の一階、一番奥まった、4人ひと部屋の、あの狭い研究室に押し込められたときからはじまったのだが、そのとき押し込められた4人のうちのひとりが先生であった。先生は当時、学生部長をつとめておられ、いまは本部棟に建て替えられてしまって跡かたもない、本館とよばれる戦前からあったらしい記念碑的な建造物の学生部長室で執務されていた。それがつい昨日のことのようだ。

授業のある水曜日は、思えば、いつもご一緒してきたような気がする。下世話に言えば神酒と徳利、いささか旧弊な言い方をすれば影の形に添うが如くとも言おうか、とにかく先生とはここ20年、よくご一緒してきたものだ。

あのころは先生もまだ五十に手が届くか届かぬ年代で、いまよりはるかに元気だった。お酒はもちろん召し上がる。それもずいぶんイケル口ではあるし、それは今もかわらないようにみえるけれど、一陶の酒を楽しみ、陶然からようやく爛酔の境に入ることを好むというよりはむしろ、アルコールが醸成する賑わしい雰囲気や歓語をたのしむほうを好まれたようだ。しかもそのお人柄は豪放というよりは豪宕、豪宕というよりは豪侠、かつその豪侠が細心の気配りと渾然一体しているという稀有な幸福の持ち主であり、またその風貌のなかに明晰な頭脳を隠しつつ、その身边にはつねに春風駘蕩としたアウラを放散しておられるため、おのずからいつも一座の中心に居ることを強いられるばかりか、一面識のひとたちからでさえ、まるで十年の知己のように敬慕されるという具合であった。

先生はどうやら酒精よりも、雄偉な身体と強健な胃腸のしからしむるためか、口腹の楽しみを楽しむことを人生最大の快樂とされてきたらしく思われる。むかしは病気のかたまりみたいな、いまでも食のほそい私などから見れば、なんともうらやましいくらいの、それは見事でたくましい食欲だった。ちかごろはそれもかなり減退したようだが、それでも、どこかの料理屋でいっばいやりながら腹をくちくしてから、ストレスの解消と称して陽気に飲みかつ歌い、それからさらに遅い時間に、「鮨は別腹」などといって、十貫やそこらのすしをつまんで先生はなお平気である。したがって先生には<酒業自得>というべき、酒のうえでありがちの自業自得にホゾを噛むようなことはたえて見うけられず、すこぶる酒品のよろしい愉快的飲みぶりであった。

*

いつだったか、30年以上もまえのことだけれどと枕をおいて、あるひとからこんな話を聞いたことがある。これはそのときその場に居あわせたそのあるひとから聞いた直話だし、しかもいまでも先生にはその片鱗がのこっているのだからさこそと私にも思われるが、ある時、その話柄の主と先生が上野か浅草あたりで飲んだことがあったそうである。そしてその酒亭に妙齡の美人（ということにしておきたい）がいて、先生はあろうかことか、ひとかわ目の、中高なかだかなおもぎしのその美人を相手に、一を言えば十を言い、十を言えば二十を言う、肉を切らせて骨を断つ、地擦り青眼にとったかとおもえば上段に構え……という具合に、まるで鏘然と鳴る鑼をけずる音が聞こえんばかり、当意即妙、才気横溢、機知縦横、丁々発止の遣りとりをかわしたのだそうだ。

酒席に陪席する女性とのこのような遣りとりは上方ではあまりないことのように思われるが、しかし、東京ではけっして野暮とも無粋とも見倣されず、むしろ、張りど意気地を重んじる土地の伝統からか、女性のほうも負けてはならじとやりかえす。まるで藤八拳を打つがごとく、ぽんぽんぽんと交わされる鉄火なその応酬は、さぞかし胸のすくような光景だったにちがいない。

が、先生は相手にかの女を選んだことを誤り、かの女は先生を相手に選んだことを誤ったらしいのである。というのも、私にこのことを語ってくれた話の

主から、「山縣さん、あのこ、あの翌日、店を辞めて、^{くに}京都へかえってしまったんだぜ」と、懐かしさといささかの恨めしさのこもった口調で、その後日譚が語られたからだ。「あんなおひとははじめて。東京でくらす自信がなくなってしまった。」というのが、その京女が店を辞めるときに洩らした東京でのさいごの言葉だったそうだ。

無理もない。相手がわるかったのだ。狭斜の巷でくらす京都の女性というものはたいてい、酒席を周旋することには過大な自信をもっているものだし、またあのはんなりとした京都ことばをそっと紅唇から囁きさえすればどんな男どもでも自家薬籠中のものにできると思い込んでいるものだが、かの女の不幸は、先生がときおりややもすると、まるで横溢する才気の捌け口をもとめるかのように、いざこそござんなれと言わんばかりに相手を座談に引きずり込み、拳げ句の果ては、双方とも退くも引くもならないところまで追い込み追い込まれることがあるのを当然のことながら知らなかったことである。そしてかの女のもうひとつの不幸は、先生ときたら、かたわらにはべる容顔美麗のなかにご自分と同質の才気と諧謔のひらめきを発見しようものなら、ヤニ下がるのが沽券にかかわるかのごとく、かえってその戦闘意欲を昂揚させることあるのを知らなかったことだ。ひとごとながらそのひとはいまどうしているかしらんとふっとおもったりする。

*

ところで先生はときおり冗談めかして、「ぼくが出たのは東京大学英文科ではなくて、東京大学バスケットボール部だ」と言われることがあった。先生が在学したころの東大文学部は、英文科に斉藤勇・市川三喜・中野好夫、仏文科に辰野隆・鈴木信太郎などという層々たる教授陣を擁した、東大文科のいわば黄金時代だったはずだが、戦後もまもない焼け跡闇市の時代で学問らしい学問にも身がはいらず、バスケットの練習と対抗試合にあけくれていたものだが、こんな碩学たちの講義を聴き警咳に接することができただけでもほんとに仕合わせだったと、しみじみ述懐されることがあった。

旧制の東京府立高校時代からはじめた先生のバスケットボールは、しかし、

ずいぶん「鳴らしたもの」だったそうで、めったに自慢話などすることのない先生だが、日本バスケットボール協会の歴史をつたえる本のなかに先生の名前が載っているのだと、嬉しそうにおっしゃるのを私は聞いたことがある。ほんとうに名選手だったらしいのだ。そのヨスガをいま窺い知れるのは、でも、背の高さと、時折かいまみられる運動神経の機敏さくらいですネ、と横あいから半畳をいれても、バスケットボールの話をしていれば、いつでもきまって先生は機嫌がいいのである。

先生がスポーツ青年になられたのは、小学校時代、〈健康優良児〉として表彰されたことにそもそもの発端があったように私には思われる。心身ともに健全かつ学業優等の児童生徒を表彰するこの制度は、私なぞは、戦後アメリカから導入されたもののようには思っていたが、どうやらそうではなく、先生の話から推察すれば、戦前・戦中のあの時代、日本を背負って立つ未来の少国民を育成しようとする国策にのっとり、内務省あたりが考案した制度だったらしいのだ。そのかつての健康優良児童の先生が、医家であられたお父上の意に背いてなぜ文科を選ばれたのか相当の理由や動機もあったろうけれど、解剖の授業を考えただけでも医者なんてとてもじゃないぞと言って韜晦し、そのあたりになると含羞のおひとらしく、先生はおおくを語られない。

「それを、Yのやつ」と、先生は、のちに高名な小説家になった同級生の名をあげて、「山縣くん、底のない網にボールなんか入れて、どこが面白いのさ？」なぞと揶揄されたことがあったと、そのころから原色の街に沈湎していたらしいその小説家が急死したとき、なつかしように、淋しそうに、ぼつりと回想されたことがあった。

格言ふう^にに翻訳すれば、「人生身方半分敵半分」「結婚生活においては十の真実を告げて^{つま}も家妻五の真実しか受け入れられない。」「隣に座った婦人のホクロのありかを細君に語ってはならない。」等々、こんな箴言に似たことばを先生はときおり口にされることがあった。いずれも人生の達人^{モラリスト}にふさわしい一家言として私は傾聴しながらも、先生ご自身はそれをあまりユニークだと思っていないところがいかにもまた先生らしいといえた。これらはみなどれも余所で見

たこともなければ聞いたこともないから、多分、先生の発明かあるいは自家薬籠中の哲学に化しているものにちがいない。

なかでも、これまであい涉ってこられた先生の人生とそのお人柄を要してあまりあると私の思われるものに、「^{うち}自宅は買うものではなく売るものである。」がある。先生はお父上から遺贈された新宿・下落合の屋敷を売り払ってくみんな飲んでしまった>という伝説の持ち主だから、日々アクセクしている私のような凡下の青書生にはとうてい舌頭に転じることもしない<哲学>である。しかもその伝説がほんとうらしいのだから、いよいよもってその哲学の説得力はいつそう重みをくわえる。

ところで、先生のように、金銭を物品購入に用いるよりもむしろ人をもてなす饗宴に消費することを<衒示的消費>と呼ぶそうだが、先生はこれまで日夜その衒示的消費に専念してけっして悔いる気配がなく、なおも恬然として、施すこと多く求めること少ない。先生を知るたれもが、恂に山縣先生のように有徳で人間的魅力にあふれたなおひとは有り難い、と感嘆をこめて心からの褒辞をおくってやまない所以も、ひとつにはそこにあるのかもしれない。

だから先生のさいしょの格言は、道歌ふうに、「世の中は身方一分に敵一分あとの八分はひとによりけり」くらいに改訂したほうが適切かとおもうが、どうかしらん。

*

古人は「山中曆日ナシ」と言っている。曆日ナシとは、雲烟万里、遠く人間^{じんかん}をはなれて時の流れるまま日が一^{いち}日なんのなすべきこともなく荏苒として時を過ごし、曆の存在の無用性を自覚することをいうのか、真の老莊思想が本来的にはらんでいる時間認識の積極性をさしているのか、私にはにわかには即断する自信はないけれど、それでも、毎日が日曜日などという今様の、そんな小市民的な生活様式は先生にはけっして似合わないように私には思われる。

なるほどわれらの人生、本卦に返り、さらに古稀をむかえるころともなると、一日一日を無事息災に過ごすことじたいがたいへんな事業であるらしい。いつだったか、先生は、いたずらっぽい微笑を口辺に浮かべて、「きみにもいつかき

っとそんなときが来るにちがいないヨ」といって、ふっと呟くように、「秋風や
わすれてならぬ名をわすれ」という久保田万太郎の発句を口にされたことがあ
った。その句意をすでに我がことのように実感させられているこのごろの私と
しては、いっそうのことだけれど、でも、先生にはこれからもずっと、20年前
にはじめてお会いしたときのようにお元気でいていただきたいし、またときには
楽しい座談のなかで、我らかつての悪童どもを、利剣のようにするどい、い
かにも都会人らしい先生の機知の槍玉にあげていただきたいと願ってやまない
のだ。都内某所のかのひとだけは除外していただかなければならないけれど。

*

山縣先生、「男子は庖厨に遠ざかる」などと、旧時代なことはおっしやって
はいけません。「七十にして厨房に立つ」という時代、これからも末永く奥様
の好き伴侶でありつづけるために、喩えていえば、煙草を買いにゆくにもタキ
シーをひろうほどの歩行嫌悪症を克服し、これからは日に万歩月に三十万歩そ
して一年三百六十五万歩をあるき、あの江戸時代のカートグラファーのよう
に<四千万歩の男>にきつとなっていたいただかなければなりません。

山縣先生、HAPPY RETIREMENT！ ご退任おめでとうございます。

山縣先生、これまでほんとうにありがとうございました。

山縣敏夫先生の思い出

落 合 和 昭

(外国語部第一群主任)

外国語部第一群（英語）の山縣敏夫教授が、平成8年3月31日をもって、退職されました。定年まであと一年を残しての69歳での退職でした。ここ数年、先生は御健康があまりすぐれず、講義や会議等の出席の際も、おつらいときも多々あったと思いますが、先生のおおらかな風貌のせい、はた目には、その病状の深刻さはさほど感じとれませんでした。そのため、私は個人的には先生は必ず定年までお勤めになるもの、と思い込んでいました。しかし、去年の秋に、先生から突然「落合さん、どうも身体の具合がよくないので、今年かぎり、退職するつもりでいる」と、聞かされたときも、先生の病状の深刻さもあまりわからず、私は「先生、まだまだ、大丈夫ですよ。定年まであと一年だから、続けられたらいかがですか」と言ったぐらいでした。そのとき、先生は「じゃあ、もう少し様子を見てみよう」ということで、その場はお帰りになりました。それから何週間か経ったころ、先生から「落合さん、やはり、どうも身体の具合がおもわしくない、退職する」と、聞かされ、その決意の堅さがわかったとき、あらためて、先生の病気の深刻さを知りました。しかし、考えてみれば、昭和37年4月に駒沢大学の専任講師になられて以来、助教授、教授と、じつに、34年の長きに渡り、講義や会議等に明け暮れてきたのですから、御身体の具合がよくない現在、ここらあたりで、ゆっくりと静養なさって、病気を完治なさったのちに、また、新たな出発をお考えになるのがよいのではないか、と思うようになりました。

そして、山縣先生の退職が第一群の教室会議や教授会で報告されたあと、紀要委員から山縣先生について思い出の文を書くことを依頼されたとき、私は山縣先生との一番最初の出会いを思い出しました。その出会いの場所は教室でし

た。つまり、私はクラスで山縣先生の御指導を受けたことがあったのです。私が外国語部に所属したとき、外国語部には、私が教室で教えを受けた先生がお二人いらっしゃいました。もう一人は数年前に、定年退職したスペイン語の細川幸夫先生でした。細川先生は私が初めて教室でお会いしたときの「細川先生」と定年で退職なさったときの「細川先生」とをくらべてみますと、まったく同じ「細川先生」でした。30年間、まったくお変わりがありませんでした。その点、山縣先生も同じで、30年という年月だけ経っただけで、ほとんどお変わりにはなりません（特に、体型は当時のままです）。お二人の先生とも、私が大学一年のときの第一外国語、第二外国語担当の先生でした（細川先生は、一年だけではなく、二年のときも、私のスペイン語クラスの担当でした）。当時は、お二人とも教室では御自身で著されたテキストを使用していました。山縣先生のクラスは「英語G」で、テキストは、もう30年以上も前のことではっきりとは覚えていませんが、確か、黄色の厚手の表紙(?)の文法のテキストであったように記憶しています。教室では、文法の説明を詳しくする、というよりも、重要な用法や構文を含んだ例文の解釈に重きを置いた授業の進め方であった、と思います。必修科目の「英語G」のクラスを履修しなければならなかったとき、高校時代に、文法の説明はうんざりするほど聞かされていきましたので、内心、また、大学で文法の説明を聞かされてはたまらない、と思って、少々食傷気味であったところ、授業はそれに反して例文の解釈が主であったのでほっとしたのを覚えています。

御指導を受けた細川・山縣両先生が相次いで退職することによって、大学には、私が御指導を受けた先生がた全員が退職されました。それは私にとって誠にさびしいことですが、しかし、そのかわりに、新しい先生がたも次々に加わりながら、外国語部も発展していくもの、と思います。山縣先生も一日も早く御健康を取り戻しになって、新たな人生を歩まれることを心から祈念いたします。

最後に、少し長くなりますが、以下の文章を山縣先生への「送る言葉」といたします。

『天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。
生るに時があり、死ぬるに時があり、
植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、
殺すに時があり、いやすに時があり、
こわすに時があり、建てるに時があり、
泣くに時があり、笑うに時があり、
悲しむに時があり、踊るに時があり、
石を投げるに時があり、石を集めるに時があり、
抱くに時があり、抱くことをやめるに時があり、
捜すに時があり、失うに時があり、
保つに時があり、捨てるに時があり、
裂くに時があり、縫うに時があり、
黙るに時があり、語るに時があり、
愛するに時があり、憎むに時があり、
戦うに時があり、和らぐに時がある。』

山縣先生惜別

栗原万修

(外国語部第二群主任)

残念ながら、英語の山縣敏夫先生が定年を1年前にして大学を辞められることになった。辞めると決まったら体調がよくなったとみんなを笑わせ、それならばまた戻ったらと、真顔ですすすめられた。誰もが、先生が辞められるのを残念に思っていたからである。

山縣先生は外国語部の同僚だけでなく、他学部の先生や職員の人たちにも信望が厚かった。学生部長をやられたということもあろうが、どうもそれだけで

なく先生は人に好かれるお人柄だったのだろう。お人よしで、育ちのよさを感じさせた。外国語部長に選ばれたときも満票だったが、そういうことは滅多にあることではない。

なによりも山縣先生に接していて感じることは、人柄のよさ、人を楽しませるユーモア、そして同席する人に気を使う稀にみるサービス精神をお持ちだったことである。いつも人に不愉快な思いをさせないようにと気を使っておられたようだ。教授会等で発言されたときも、後になって、言い過ぎていませんでしたか、などとよく聞かれたものである。人と話されるときはいつでもご自身謙遜されておられたが、人に褒められたりするといかにも恥ずかしそうな顔で否定された。

もっとも、だからといって先生は決して無口というわけではなく、酒席などではいつも話の中心になってよくしゃべられたし、にぎやかなこともお好きだった。どちらかといえば今は滅多に見かけない粹人という風情があったように思う。20年ほど前、懇親会だったか歓送迎会だったかの席でたった一度だけ拝見したことのある先生の〈南洋のラバさん〉は、まさに絶品だった。みんな腹を抱えて笑い出し、しばし笑いがとまらなかった。その後その〈絶品〉をついに二度と拝見できなかったことが今にして思えば痛恨事！である。

私が部長をしていたとき先生のご母堂が亡くなられご焼香に参上した。そのとき初めて奥様にお目にかかり、いかにも先生にお似合いの方だと思った。最近、奥様の視力が落ちて先生がいろいろお世話をされておられるようにお聞きしたが、そのことも先生が定年を前に辞めようと考えられた理由の一つだったらしい。ときおり奥様に本などを読み聞かせておられるそうで、やさしい先生のお人柄が目には浮かぶようである。いつまでも奥様を大事にされ、また先生ご自身も健康に留意されて、末永くお幸せに過ごされますよう心よりお祈り申し上げ、併せてこれまでのご交誼に対しても厚くお礼を申し上げたいと思う。

「思えば遠く来たもんだ」

大 川 浩

(英 語)

山縣先生が定年を目前にしてご退職されるとのこと。淋しい思いがするのは私だけだろうか。いたずらに光陰を送り、人生の黄昏の時に茫然と立ち尽くすわが身に去来するのは青春時代に愛読したダダイズムの詩人の歌―「思えば遠く来たもんだ」。

「貴殿に本大学文学部専任講師を委嘱いたします」という辞令を当時の榊林皓堂総長より手渡しされて、おそろおそろ駒沢大学の門を潜ったのは昭和四十四年の早春。山縣先生はその七年前からすでに大学で活躍をされており、文学部、英米学科の花の助教授。大学人としても、まさしく燦然と輝く中枢存在であった。年配の諸先生は別として、現在「刺抜き地藏」の若様に変貌した、若かった来馬先生、痛ましくも交通事故死された温厚な善浪先生、道半ばにして他界された三好先生、年経ることを知らずご活躍中の坂本先生―当時、若かった諸先生の中でも、背が高く、端正な容貌をした、寡黙な小林先生と大人の風格を漂よわせ、それでいて周囲への目配りも忘れることなく、更にはデリカシーに富んでいたお二人は新入りの私には眩しい存在であった。重厚な風貌の中にもユーモアの精神が横溢され、間を置くことなく繰り出される、山縣先生独特の冗談は他に類を見ないものであった。

文学部から組織がえして外国語部が独立して以来、英語科の重鎮であり、「和」の中心でもあった。主任・部長という激職を歴任され、あわせて三十有余年にわたって学生指導をされた先生には全く頭のさがる思い。だがそのことが先生の精神、肉体の両面にストレスが蓄積され、その結果、罹病されて退職されることになってしまったことは、公私にわたって色々とお世話になった私にとっては、やむを得ないと思いつつも淋しい限り。

山縣先生も熟知されておられる通り、職を退くことは人生をやめることでは断じてない。願わくは、今後とも病弱の奥様を庇いつつ、小林先生の指導のもと、写真技術の向上を目指して、日々、充足した人生をいつ迄も過ごされますことを念じております。

山縣先生の退職を惜しむ

石原孝哉

(英語)

山縣先生とともに過ごした25年間の教員生活を振り返ってみると、その思い出のほとんどが渋谷、新宿など「放課後」を過ごした所に密着しているのは驚くばかりである。私はそんなにお酒が飲めるほうではなかったが、それでも先生とご一緒したことは数え切れない。もちろん先生のほうはその都度相手を変えてほとんど毎日のように飲んでおられたのだから、記録さえ完備していれば当然ギネスブックに掲載されていたはずである。

こう書くといかにも「斗酒なお辞せず」といった大酒豪に聞こえるが、私の知る限りでは山縣先生は「酒のみ」にあらずして「酒飲ませ」であった。いつもわれわれ「若い(?)者」を引き連れて飲ませ、食わせることに喜びを感じておられた。ときに借金をしてまで他人に飲ませるといふ実に奇抜な方であった。最近ではわれわれ「若い者」も「オジン」となり、また先生のほうも体調を崩されて「放課後の課外活動」のほうも多少控えられたようである。しかし、教室会議や教授会から解放されることが正式に決まると、心の重石がとれたのか、昔の元気を取り戻されたようで、ほっとしている。

さて山縣先生にはもう一つの思い出がある。先生のほうは覚えておられないかもしれないが、ちょうど33年前、二年生のときに1年間先生の授業をとらせていただいた。中島関爾先生から前もって「東大の英文科を出た秀才で、バ

スケットのエースだ」と聞かされていたので、皆わくわくして最初の授業を待っていた。すると長身瘦躯の先生が戸口で身をかがめるようにして入ってこられた。現在の先生のお姿からバスケットボールを連想することは、豚を見て真珠を連想するより難しいが、私に限らず当時の学生はみな、ごく自然に先生が華麗にダンク・シュートをする様を想像できた。

山縣先生の大声はつとに有名で、教室のいちばん後ろの特等席でもとても眠れなかった。当時の学生の「安眠」を妨害した先生方としては、山縣先生のほかに、英会話のライダー先生、実践女子大から出向されていた佐藤吉介先生、それに中島関爾先生が四天王であった。この先生方は自分の大声を棚にあげて、互いに相手の大声をさも迷惑顔に学生に嘆いてみせるのが愛敬であった。ときには窓を開けて「ウルサイ！」と別棟の教場を怒鳴る一幕もあって、教室はにぎやかであった。

中島先生、ライダー先生は鬼籍に入られて久しい。先年佐藤先生が定年でおやめになり、最後の山縣先生も大学を去られた。

大学は静かになった。

今では、マルチメディア、ビデオ、LLなどが注目され、おかげで語学教育の現場も様変わりした。性能のいいマイクが各教室に完備したので、先生の唾に濡れる学生も少なくなった。だがそれと同時に、人の温もりとか優しさとか、言い替えれば「山縣先生的なもの」も失われつつあるように思う。寂しい限りである。ご退任について、先生ご自身は健康上の理由以外一言も口に出してはおっしゃられなかったが、この一年間の先生の様子を見ていると、最近の大学内の混乱や、外国語部内の状態にいささか失望しておられたのではないかと思われる。一見豪放磊落に見えるが、人一倍他人を思いやり、気を配る繊細な神経も合わせ持った山縣先生に、もしそのような心配をさせていたとすれば、われわれも心からお詫びしなくてはならない。今大学は、新しい姿に生まれ変わろうとして、いわば「生みの苦しみ」の中にいる。それは嵐の海に帆もなく、舵もない状態で漕ぎ出すようなものである。

さいわい山縣先生は退職後も現在の地に住まわれるようなので、われわれの

船が沈みそうになったり方向を見失いそうになったときは、すぐに飛んでわれわれを導いて欲しい。

人生足別離

清水 祐次

(英語)

私が駒沢の専任にさせていただいたのは、六十年代の終わり近く、折りから学園紛争の嵐が全国の大学に吹き荒れているさなかのことであった。

採用がほぼ内定した頃の日、主任教授の中島先生のところへご挨拶に伺った。先生の研究室は、野球部の合宿所跡を転用したという旧第一研究館の三階にあった。初めてお会いする主任教授の前で、私がすっかり固くなっているとき、恰幅のいい、品格ゆたかな先生が悠然と部屋に入ってきた。中島先生が私を紹介して下さったのを受けてその先生は、

「助教授の山縣です」

と丁重に挨拶して下さった。思えばこの時が、私にとって先生との最初の出会である。先生は初対面の私にも、ごく気さくに、「うちの助教授は佐々木さん、三好さん、坂本さんとぼくの四人です」といったような話をされた。

このように風格のある立派な先生が、まだ助教授でおられることに、私はまず大きな衝撃を受けた。この分では私など、定年まで勤めたとしても助教授には到底なれそうもない、というのがその時の率直な思いであった。

主任との用件を済ませたあと先生は、小心そうな私の気持ちをほぐしてあげようと思われたのだろう、近くにあった椅子に腰掛けて気軽に雑談をして下さった。そしてその終わりに、

「うちは若手みんなで和気藹々とやっていますよ。分からないことや困ることがあったら、何でも遠慮なく言ってください」

と思いやりに満ちた、身にあまる温かい励ましの言葉をかけて下さった。

先生にしてみれば、ごく軽い意味で言われたであろうこの時のひと言が、(今でもそうだが) 気おくれがちな当時の私をどれほど力づけてくれたか、計り知れないものがある。生まれたばかりの小動物が、最初に温もりを感じた庇護対象に専ら慕い寄るように、それ以後何か事あるごとに私は、寛大で包容力のある山縣先生の温かいお人柄に、ひたすら頼り続けてきた。

うっかりお世辞も言えないな、と先生を苦笑させる折りも多々あったことだろう。今にして思えば、世間知らずの私からの厚かましいお願いやら愚かしい相談ごとの数々に、先生はさぞ迷惑し、当惑を覚えられたことであろうが、井伏鱒二を思わせるそのふくよかな温顔に、なごやかな笑みを絶やすことなく、いつも優しく親切に対処して下さいました。しかも当時、学内のさまざまな要職を歴任されて、ことのほかご多忙であったなかにも、とるに足りない末端の私のごとき者にまでみせて下さった、先生のこまやかなお心配りの有難さは忘れられない。

願れば、実に三十年になんなんとする永い歳月にわたって、先生から受けた深いご恩は、月並みな言葉で表現できるものではない。それも私が一方的にお世話になるばかりで、何ひとつとしてご恩返しらしきこともしていない。あまつさえ、生来の口下手ときているので、碌なお礼の言葉さえ申し上げていない。先生、無能なうえに物知らずな私をどうぞお許し下さい。

「清水さんが酒が飲めたらなあ」

と、ある時先生がふと洩られたことがある。それこそかねがね私の願っている思いでもあった。私のひそかに熱愛する吉備の詩人作家木山捷平が、同郷の先輩井伏鱒二と酒を酌みつつ、のどかに縁台将棋を指しあう姿に、自分と山縣先生を置き換えて、ひとときの愉しい空想にひたったことも幾たびもある。

コノサカヅキヲ 受ケテクレ

ドウゾナミナミ ツガシテオクレ

惜別の春を迎えて私はまたも夢のなかで、深く敬愛する先生と差し向かいで、駒沢の古き佳き日々を懐かしみながら、名残りつきぬ杯を親しく酌み交わすの

である。

山縣敏夫先生へー第三の青春を

田 中 保

(英 語)

山縣敏夫先生が、定年あと1年を残して、体調思わしくなくこの3月をもちまして、34年間の永きに亘り教鞭をとられてきました駒沢大学を退職なされました。定年までお引き留めできなかつたことは、誠に残念でありませんが、先生にとりまして、この1年がこれからの人生の10年、20年に結びつくのではないかと思うと致し方ありません。

先生とは、私が専任として駒沢大学にお世話になりました昭和48(1973)年4月からのお近づきですから、もう23年のご交誼をお願いしていることになります。私が専任講師の頃は、研究室が旧研究館(現在の第二研究館)にありましたが、今日のような各々の研究室ではなくて、研究分野別に一部屋を数人の方が使用していきまして、私は先生と同じアメリカ文学ということから一階奥の突き当たりにはありました5人部屋研究室でした。そのころ、先生は英語科の主任をなさっており、英語科教室会議なども先生方に奥の部屋に集まっていただけで寿司詰め状態でおこなわれましたが、会議というよりは、ほとんど連絡事項や報告程度でしたので、和やかに短時間で終了したものでした。私は先生の隣机でしたので親しくお話をさせていただきましたが、先生の博識には感服するばかりでした。あるとき、授業について、「学生と一体感の持てるような授業ができなくて困りました」と、申し上げたところ、「そうした授業が年に1、2度あればいい方ですよ。私だってなかなかありませんよ」、と新任の私の心をおもんばかって言われましたので、ただ頭の下がる思いでした。

先生は、英語科主任を辞められてから、学生部長や外国語部長の要職に就か

れましたが、依然と変わらず気さくな話しぶりで接してくださいまして、時間が許せば、駒沢や渋谷界隈で一杯いただきながら、何かとお話をする機会も多く、先生の学生時代のこと、教師生活のこと、スポーツのこと、英米文学のこと、……といったようなお話を独特の語り口でユーモラスに語って下さいました。スポーツのことはなんでも御座れで、野球のことなどは野球部監督太田先生さえも舌を巻かれるほどの野球通で、特に我が駒沢大学野球部に関しては、生字引と言っても過言ではありません。先生ご自身は東京大学の学生時代バスケットをなされていて、日本バスケット協会の協会史に名が残されているほどの選手であったそうですが、いつでしたか、その話を伺って、アルコールの力もかりて、「え、え、本当ですか」と、申し上げ、先生のお体をまじまじと見ましたら、「昔は、これでもスマートだったんですよ」と、おっしゃられましたが、それでも疑いの眼差しで私が見るものですから、「折りがあつたら、学生のころの写真を見せて上げましょう」と、言い、暫くして、想像し難い、ほっそりした先生の写真を拝見させていただいたこともありました。そういえば、先生が駒沢大学に奉職されたとき、「バスケットの山縣先生ですか」と、当局の方から言われて、嬉しかったよ、と話されたこともありました。

先生の天真爛漫で、温厚なお人柄はスポーツによって培われたのではないのでしょうか。先生が学生部長の任にあつたとき、学生に対する姿勢を垣間見させていただきましたが、学生を学生としてではなく、人として接し、また、学生部は学生を管理する部署ではなくて、学生を尊重し、学生のために援助してあげる機関であるといった一貫した精神が伺えて、悦ばしく思いました。学園通信（第207号）の「在職中の思い出」に、先生は、「教壇での思い出は私の第二の青春……」と、述べられておりますが、どうぞ、これからの人生を、奥様と共に、第三の青春と思われて過ごされることを願っております。第三の青春を大いに楽しんで下さい。

山縣先生とのお別れにあたって

矢島直子

(英語)

山縣先生が新カリキュラム施行直前に駒沢大学を辞められたのは、正に一時代を画する象徴的な出来事のように思える。昨年度、先生とお話していた時に、「駒沢大学は昔は牧歌的でしたよ」と言っておられた。失礼な言い方を敢えてすれば、多分にどんぶり勘定で物事が行なわれていたのではないかと思われるのだが、先生の言い回しを伺った時、昨今の私たちが失なった良い面も多々あったのではないかと率然として悟った。最近の駒沢大学は、組織としての体制をかなり整えてきているが、恐らくそれがために、ギスギスしたところも出てきたようだ。かつてのゆったりとした雰囲気があったらしい時代の体現者のお一人である山縣先生が去られたのは、何とも寂しい限りである。

外国語部としても、幅広い人脈を持つ方が去られたのは痛手なのではないかと思われる。先生が退職なさる前、お別れ会が12回程あったと伺っている。そのような人脈は貴重な財産なのであるから、先生が去られたのは惜しい事である。

学生にとっても、「仏様」の先生が辞められたのは困ることであろう。授業も楽しいものだったに違いない。一度だけ先生の隣の教室で授業をしたことがあるが、時々学生たちの笑い声が聞こえていた。大きな身体でいらっしゃるのに、細やかに気を使うタイプの座談の名手でいらしたから、その腕を授業でも存分に発揮なさったのだろう。

私個人にとっても、先生が去られたのは痛手である。後悔先に立たずと言うけれど、もっと仕事の事など色々教えて頂いておけばよかったと思う。とはいえ、これからもお会いできる筈であるから、今までの分を取り戻すことはできよう。そのためにも、先生にお体をくれぐれも大事にして頂きたいと切に念じ

たが、昨年2月に起きた、例の入学試験答案盗難事件について、相対的に、答案採点に、より多く関わっている外国語部として、更に一步踏み込んだ意思表示や態度表明をすべきかどうか、ということ審議する臨時の会議を前にしてのことだったと思う。英語のO先生が私の席に近づいて来て、耳もとで、山縣先生が定年を待たずに、来年3月一杯でお辞めになるとおっしゃって、わたしどもがいくら止めても、なかなか言うことをお聞きにならない、それに今日此の会議で、岸本部長から公表することになっている、なんとか引き留めて欲しい、と言う意味のことを述べられた。寝耳に水の私には、何故という事態の詮索よりも、そして英語の先生たちが引き留めて止まらぬものを、この私に引き留められる訳がないことを、重々承知しながら、向かい側の山縣先生のそばに行き、とにかく今日は出さない、公表しないことだけを約束させようと説得にかかったのである。先生は人の気を反らさない、思いやりのある気持ちを、たっぷり持っておられる反面、言い出したら自説を曲げようとしなない頑なな面をもお持ちである。特にそれが他人との関わりが稀薄で、もっぱら自己の領域内のことであれば、言い出したらそう簡単に引くものではないことは分かり切っている。自分の勤めの最後の締めくくり、出処進退の意思表示をするのに、「臨時」などという冠のついた教授会なんかに出すべきではない、今日はとにかく出さないで、ゆっくり話す機会を持ちましょうと、私は一方では先生の自尊心をくすぐり、また一方では哀願を試みたのである。此の場の結果は、ひとまず意外に望ましい方向に決着がついた。そうだね、と先生はあっさり意志を翻し、事前に私に相談しなかったことを気にしておられる風でもあった。そんなことはないのに、先生はよく気配りをなさる人なのである。細かい神経の行き届いた配慮をなさるのに、瘦せた姿を人目に晒すことの無かったところを見ると、よほど秀れた消化器官の持ち主ではないかと、常々驚異の目を見張ったものである。とにかく私の「顔を立てる」お気持ちが先生のどこかに働いたのかも知れない。私は臨時の会議開始の宣言をなさろうとする部長のもとに行き、ご本人も納得しておられるから、今日の会議には出さないよう頼んで席に戻った。

先生がさらに意を翻すというか、本来の方針に戻るまで、殆どひと月とかからなかったように思う。あらたまってという訳ではないが、もちろん話し合う機会も持った。私が何げなく家でぼやいたとき、もう少しなんだから、住みやすくして、定年まで居ていただかなければ、などと呟いていた家内のことなども伝えた。皆さんからそう言っていただくのは本当にありがたいと、先生は、あのサビのある、どすの効いた声で行った。そして血圧も高く、どこもかしこも調子が悪いと、いろいろと具合の悪いところを数え上げた。それから幾日も立たないある日、たしか同僚の先生と一緒に昼食をとっていたときだったと思う。ドアをノックして、開くなり、「もう学長と副学長のいるところで、辞めると言ったきちゃった、もう止めたって駄目だよ」と、茶めつけたっぷりに言うのである。

私をもふくめ、定年のゴールがちらほら見え隠れするころになると、体のあちこちにがたがくるものである。若い気でいても、核家族が分裂を重ねて、「老夫婦」と言われてもけっして可笑しくない二人が取り残されると、否応無しに「一蓮托生」を地で行かざるを得ない。「死後、ともに極楽に往生して同一の蓮華に身を託すること。」あるいは、「善くても悪くても行動・運命をともにすること。」現世では主として後者の意が幅を効かせて、人間に極楽往生を意識させ、思いやりを教えるのである。だから「山縣先生でも買い物なさんですって」などと半ば驚きを装っておっしゃる向きもあるが、そういう人はまだまだ己の時間に余裕たっぷりの人であって、先生のヒューマンな側面をあまり分かっていないか、あるいは分かっていながら不審を装って先生の間人らしい側面を改めて確かめようとする人なのである。山縣先生といえば、その悠ったりとした、うねりを感じさせる独特な体軀、——そのむかし給与委員会のころ、今度は（給与を）目方で決めようよと人を笑わせたことがあった——その歩き方からして、「男子厨房に入るべからず」がいかにも似合いそうな、「孤高の人」に見える。しかしそれは神話仕立ての、誰にもありがちな昔ばなしのような気がするのである。先日、新年度を迎えるには未だ間がある、年末か新年に入ってからのことであつたらうか。会議を途中で失礼して、車で大学構内か

ら通りへ出ようとしたとき、ヘッドライトに、あの山縣先生独特の姿が浮かび上がった。それは正面から顔を覗かなくとも、シルエットだけでその姿が誰であるか分かるのである。よろしかったら途中までどうぞ、ということになって246をしばらく走り、環八の下を通り抜けたころ、溝の口のあの辺りでいいですね、と念を押すと、ぼく、これからお惣菜を買って帰ることになっているので高島屋の辺がいいとおっしゃる。そこで、本館の裏手に回り、明治屋の上のあたりで降りていただいたことがあった。

ここに越して来て、もう20年にもなろうというのに、恥ずかしながら書齋も書棚も余りよく整理されていない。そういえば聞こえはいいが、不必要なものは捨てるという、断固たる決断力に欠けるものだから一向に整理されないままなのである。そこで新年度もいよいよ始まろうというころ、不要になった雑誌や書類の類いを整理していると、捨てられずに生き延びた書類に混じって、妙な紙袋の中から茶色に変色したガリ版刷りの「駒沢大学教職員組合結成の訴え」が出て来た。昭和49年11月の日付、そして「駒沢大学教職員組合設立準備委員会」その代表者13名の中に、山縣敏夫の名が刻まれていた。ここに名を連ねることの意味を取り上げ、当時の駒沢大学の事情を知るべくもない方々に、よき理解者であれかしと願うのは、些か無理な注文である。しかしまここでその辺の事情の解説に道草を食う暇は無い。いづれ退職するまでに、一つの記録として残したい気もするが、いまはただ、あのころの手作業の模様を覗くだけに止めたいと思うのである。いろいろないきさつから巡り巡って私がこの「訴え」の原稿を書くことになり、今日のようにワープロとか、マイコンとか、OA機器の普及にはまだ間があるころで、タイピストに打ってもらえば多分その筋に聞こえてしまうこともあるので、フランス語のN君——その後ネズミ講のようなものに連座して大学を去った——に原紙2枚に徹夜で切ってもらい、破損せずに刷れる枚数はせいぜい二、三百枚が限度と言うので、さらに原紙2枚に同じものを切ってもらった。それから夜が白むのを待って、電話の連絡が入るなり、彼の住む柿生の里まで取りに行った。この日小田急はストのため始発から運転がストップしていた。だからその大切なものを車で大学に

持ち込んで、旧図書館、現在の耕雲館の後ろ、公園寄りにあった三階だての名ばかりの研究室の一室で、その後学習院大学に移られた佐伯隆幸先生と五百枚ほど刷り上げたのであった。

私の『贈る言葉』も、思い出の中を、千鳥足で歩くうちに、されこれからが本番というところで、時間切れとスペースオーバーの警告ランプがつきそうな気配である。例えば『新扶美物語』と言ったような文章を、私などよりずっと近いところから見ている誰方かがお書きになっても、決して可笑しくないような気がするのである。まだ日のあるうちに訪ねるとなかなか見つからず、ほろ酔い機嫌になると闇夜でも結構間違わずに辿り着くことのできる不思議な路地裏の店のことなどは、ほんとうは当の山縣先生ご自身が書き残すのが最もふさわしいのかもしれない。

さいわいお体の方は、悪いところだらけのようなことをおっしゃっても、先生にとっては、一種の勲章のような、何十回にも及ぶ別れの宴に耐え得る底力をお持ちのようであるし、それどころか水を得た金魚のようにすっかり生気を取り戻された（かに見える）お姿を目の当たりにすると、これでよかったのかどうか、日本が初めて体験しつつある「高齢化社会」の問題を改めて考えさせられるような気がするのである。一昔前のことになるが、私は先生に水泳をお勧めしたことがあったが、返って血圧が高くなったと言って、先生は三日坊主で足を洗ってしまわれたことを覚えている。だから先生に健康のためのスポーツなどヤボなことはお勧めしても無駄と言うものである。そのむかし、僕はこれでもスマートだったんだよ、と誇らしげに見せてくれた、東大バスケット部を牛耳っていたころの写真、あそこ蓄えた「貯金」を今なお健康の糧にしておられるのかも知れない。聞くところによると、南武線でそう遠くない所に長女の方がおいでのようなので、奥様ともども、今後ますます楽しい生活を送られるよう、そして時には大学にも顔をお見せくださることをお願いして拙文の筆を擱く次第である。

山縣先生、御苦労さん！

松 本 丁 俊

(中国語)

私が駒沢大学商経学部に入學した時、すでに山縣先生は大学で教鞭を取っておりました、それは東京オリンピック開催された年の3年前ですので。直接山縣先生から教えていただいた事はありませんが、お寺関係の方が数人おりました、山縣先生、葛西先生……名前は全部憶えておりませんが、学生の面倒を良く見る事で、学内ではもっばらの評判でした。

大学を卒業して、再び縁があつて駒沢大学外国語部の仲間になり、又山縣先生に色々面倒見てもらいました。若いころの先生はかなりの酒豪で、いつも仲間をさそい、酒り場へ酒を飲みに出かけました。私も2～3度おつき合いましたので、先生の顔の広い事におどろきました。今は亡き兼谷先生と一度渋谷の道玄坂飲み屋に行った時、店の人は山縣先生を良く知つて、今日はどうして一緒に来なかつたかとなんども聞かれました。もともと私は酒が弱いので、つき合い程度のお酒は飲むが、自分から誘い飲みに行く事はなかつた。又酔つてしまう程飲みません。先生も酒の量は多いけど酔つたと言う話は聞いた事ありません。いかに自制心が強いかは衆知の如くであります。この点は中国人共通の事で、普段はお酒を飲む事はないが、誘われたら飲むけど、決してぐてんぐてんまで飲まない。節度がある飲み方をします。

山縣先生は大学の職員に愛されております。学生部長在任中は部下である職員とのコミュニケーションを大事にし、他の部の職員とのつなぎも大切にしております。直接どんな事なのかわかりませんが、聞いた話によると、よくポケット・マネーで食事につれて行つたり、お菓子を買って皆んなで食べる様にして、我が子の様にしていてくれるとの事です。

この様に山縣先生は皆んなから愛され、親しまれて来ました。身体の具合に

よって、早く停年を迎えられた事は、本当に残念です。しかしながら、先生の教え子達及び可愛がってもらった後輩達は元気で働いており、引き続き駒沢大学を愛し、頑張っている事は幸いと思っており、退職されたあとも身体に気をつけて、いつまでも元気で私達を見守っていただきたいと思います。

いきなソフトに青春の香り

釜屋 修

(中国語)

存在感ということばがある。あるいはそういうものを感じさせる人がいる。山縣敏夫先生にお会いして約九年、ずうっとそんなものを感じてきた。ただその人が存在しているだけでそう感じられる、というだけではないはずである。その人の存在と、その背後にある何かが私に存在感を実感させているはずである。山縣先生の場合、その「何か」がなんであるのか、つきつめたいというか、聞き出してみたいというか、軽い衝動をいつも抱いていた。しかし、酒が飲めない私には、先生と一献を傾けるということができない。先生をキッチャ店に誘う勇気はなかった。だから、九年間、いわば満たされぬ思いを先生と短い雑談を交わすことでごまかしてきた。それには、いや、いつでもそんな機会が来る、いつかたっぷりと話が聞ける、という余裕があったからであろう。その先生が定年前に職を辞されると聞いて慌てた。

研究棟の廊下を歩いていて、先生の巨躯が廊下の先の光の中にシルエットで浮かぶ。通勤途上で一、二度お会いしたこともある。そんな時、先に立ち止まって軽くお辞儀をされるのは、きまって山縣先生のほうで、私は慌ててぎくしゃくと返礼する。路上だと先生はたいていソフト帽（とおもうが）をかぶっていらして、それに軽く手を添えて持ち上げるようにあいさつされる。なんとも板についていてカッコいい。中折れ帽子をかぶってトンビのコートを羽織って

いた自分の父親をも思い出す。研究室へお入りになる先生を呼びとめて「若田部はどうしたんですかね」と野球の話などをしかける。いつか先生とじっくり話していただくための私の粉カケなのである。

しかし、私が予感していた先生の存在感の背後にある「何か」が確かな手触りでつかめる日がついに来た。ついに来て、あっと言う間に去って行った。だから私には、この次こそ、という期待感が生まれた。たしか細川先生の退職の後の恒例歓送会の席でのことであつた。山縣先生自身、まだ退職の決心などなさっていなかったことと思う。それは新宿三丁目あたりをいっしょに飲み歩いた戦後文学の旗手たちとの交友の日々の思い出話であつた。

吉行淳之介の話になり、吉行と宮城まり子のことになり、先生はすこし遠くみつめるようなまなざしでポツンとおっしゃった。「それでも奥さんと別れなかったのは、吉行のやさしさなんではないか」

たまたま隣りあわせの席となつた短い間のことではあつたが、ああ、私などが大阪にいて、貧るように読んだ戦後文学の「新人」たちと先生はナマで交流があつたのだ、と思つた。時たま野間宏本人も現れるという噂の、妹君が経営しているというこれまた噂の、「あけぼの」というぜんざい屋に偶然を期待して通つたり、梶井基次郎が歩いた坂道をうろついてみたり、織田作之助ゆかりの飲屋法善寺横町の「しょんべんたんご」の前を酒の飲めない自分をうらみながら行き過ぎたり、武田麟太郎描くところの「当たり屋」がいそうな釜ヶ崎あたりを歩いたりしていた自分の青春のすこし前の状況のまっただなかに、山縣先生はいらしたのかもしれない。私が予感していた存在感というのは、先生の背後にある、先生の青春の、戦後文学の、今となつてはかぐわしい匂いだったのである。某大手出版社の学年別学習誌に創作児童文学をお書きになつたこともあつたと、それ以上は詳しくはなく先生からお聞きしたこともある。それもまたいつか聞きたい、わが老後の楽しみにとっておきたい。

もう一つ、存在感を感じさせるもう一つの要素は、先生のナーヴァスな気配りであろうか。それは、なんとなく、涙まじりのパンの味を知つた人からそこはかたなく滲み出てくる種類のものだと思える。ただ、それについては、何も

知らないから、これも、すっかり「サンデー毎日」の先生から、先生に気づかれないようにうまく聞き出す機会を作ったの楽しみということにしておこうか。

先生、ほんとうにごくろうさま、ありがとうございました。

山縣敏夫先生と大正生れの仲間たち

細川幸夫

(スペイン語)

今年の正月元旦に山縣先生からいただいた年賀状で先生が古稀を迎えこの3月で大学を退職されると知り、すぐ神戸からお電話しました。というのは先生の誕生日は5月で普通ならもう一年大学に在籍の筈だったから、もしや病気かなと案じたからです。先生は健康状態もよくないし、この5月には古稀を迎えるのだから2ヶ月程早く辞めるだけで区切りもよいからとのことでした。山縣先生の退職でやはりこの春定年で辞められる中国語の中村璋八先生、昨年春定年で辞めた私、一昨年定年を待たず勇退された英語の小林亨先生と大正生れの教員は外国語部教授会からすべて姿を消すことになり戦後50年の節目に皆それぞれに感慨深いものがあるかと思えます。私が非常勤から専任講師に就任した昭和39年には外国語の専任教員は英語の中島関爾先生(故人)と大沢先生・山縣先生、フランス語の竹下先生、ドイツ語の吾妻先生、中国語の篠原先生と私と一緒に専任講師になったフランス語の田中先生(現在静岡大学教授)の先生方でした。私の3年後に小林亨先生と坂本武先生が英語の専任講師として加わってからは英語科が俄かに賑やかになりました。中島先生も大沢先生もよくお酒を好まれましたが、山縣・小林・坂本の三人は同じく大正15年の生れ、しかも皆酒好きでよく駒沢・三軒茶屋・渋谷界隈の居酒屋や手頃なクラブをはしごして帰宅はいつも真夜中過ぎでした。お人好しの山縣さんの場合はボーナスはそのまま酒代に消えていたと思えます。当時の山縣さんは服装などに

は無頓着でもっぱら飲む一方だったが、飲んでも乱れることはなく、時々私も付き合わされて三人と一緒に飲み屋さんをはしごして廻ったが、山縣さんの酒は楽しかった。大柄で太っていて体裁を気につけない見たままの山縣さんに私はとても人間的な魅力を感じていた。旧制高校ではバスケットの選手で今では想像出来ないほどスマートなスポーツマンタイプの人だったようだ。当時の駒沢大学の教員構成は明治生れの先生方が多く、大正生れのわれわれはその多くをあつ戦争にかりだされ、または死線を越えて生き残り戦後の廢墟の中から苦勞しながらやっと安息の地に辿りついた思いを誰しも感じていた。私の一年前に勇退された小林亨さんの飲み方は物静かで味があった。また酒席で皆に請われて披露される民謡の新相馬節は見事な一語に盡きた。

あの朗々と響き渡る美声を思い出すと端正な容貌に背広をきちんと着こなしたその後姿にふと人生の哀愁を感じたものだ。小林さんは終戦直後に肺を患われたから長年の療養生活を余儀なくされたと聞いている。私は酒を飲まないで元来が寡黙な先生と親しくお話しをする機会はなかったが、何か人生を達観したような、また世事に煩わされることを好まれない性格の方であることは誰の目にも理解できた。やはりこの四月に古稀を迎える英米文学科の坂本武さんは私と外語の同期の故か私とは互に遠慮のない間柄であったが、彼は強い個性の持主で、一見礼儀正しいがお酒が入ると少し躁を感じるような、酒席で付き合う時は疲れた。寡黙な小林さんとはさすがに酒の上で絡んでいるのを見かけなかったが、隣の人の子山縣さんとは互に小突き合いながら他愛ない口喧嘩をしながら飲んでいるので私はいつも山縣さんに同情していた。山縣さんの酒はいい酒なのにと。私が一緒に居て一番気の安まるのは山縣さんだったから。そんな山縣さんに当時よく言われたのは「ぼくは大沢さん、坂本さん、細川さん、竹下さんとぐるりをいつも外語の人に囲まれて…」と、勿論ジョークでしょうが、でも本当にそれらの人は皆相次いで駒沢を去りました。

「光陰矢の如し」「歳月人を待たず」と古人は言いました。駒沢大学でまず山縣さんという同僚を得てどんなに心強く思ったか、それまでの俗世界と比べてお互いに大学人でよかったなあーと思います。40才代のあの頃酒宴の席で

山縣さんがラ・クンパルシータを日本語で歌って私にも唱和を求めたが、私も戦前はよく歌ったものだが、スペイン語を習ってからは日本語のクンパルシータは歌詞を見ながらでないと歌えなくなっていた。それで山縣さんの期待に答えられなくて残念に思った。その昔流行したラ・クンパルシータの歌詞の全文を、次に私のスペイン語の原詩からの訳をこの場を借りて贈ります。「去りにし面影よ／今宵も又胸に辿りて／悩ましく狂える／亡がらにあてなく彷徨い歩みゆく／頼りなき心に我は泣きぬ／君よ今いつこ町の酒場の灯に／涙して佇むああひととき／今はうつろなる恋し君を忍び／せめて今宵おどり明し悩み忘れん／涙をかくしてほゝえみ踊れば／いとしの面影我が胸に返る／赤きバラの酒飲み干し歌えば／甘き恋の日ぞ忍ばる…」以上は原詩の内容とは少し異なり他愛ない歌詞であるが、戦前のドイツ映画「会議は踊る」のラストシーンにこのラ・クンパルシータの曲が登場するなど当時としては世界中に流行した曲であった。では逐語訳ですが、原詩からの私の訳を紹介します。「ラ・クンパルシータ」とはカーニバルなどで仮装行列のことを言います。「みじめなりの行列が／病める男のぐるりを／次から次と通りゆく／男はやがて悶え死ぬ身だ／故に死の床に伏して／男は過ぎし過去の思い出に苛まれ／すすり泣く／男は寄るべなき母を見捨てて／情に狂い恋にめしいて／女のあとを追えり／女は妖しく美しく／実に悦楽の花なりしが／秋風と共にその男を捨て／新たな男のもとに走れり／今や男は己の運命のきびしさの中に／独り取り残され／やがてくる死を待つばかり／しみじみと心の中に襲いくる／寒々とした冷氣の中で／男は己のなせる業の報いを／心から悔いるのだった／闇の中から苦しみの吐息が聞える／^{いまわ}臨終の^{まわ}際に男は微笑めり／男の心が安らぎて／優しい母が^{あまつかた}天方より／その男の悔悟の悩みを和らげ／その罪を赦せしを男は知りたり」以上は逐語訳であって日本語で歌えるようなものではないことを断っておきます。山縣さんは巧みにリズムをとって心地良さそうにあのラ・クンパルシータを歌ったのだから、きっと戦前私と似た境遇で青春時代を送ったのであろう。私の愛した六甲や宝塚の阪神間のハイカラ文化に山縣さんが育った東京の山の手の教養文化を重ねて当時を回想するのも楽しい。確かに山縣さんには幅広い教養の他に育ち

の良さが感じられた。それは彼の34年に及ぶ在任中権力や地位・名誉、それにお金などに執着のないとても大らかな人だったように思われてならない。俗に唄は世につれ、世は唄につれ、唄はその時代を生き証ですが、今の若者の歌う日本語は貧しいものになってしまった。私は学校の軍事教練を抜け出て無期停学の処分を受け「一兵だに適せず」との内申書のため一年二ヶ月の軍隊生活は一等兵で終わったが、行進しながら斉唱する軍歌の中にも素晴らしい歌詞があった。好きな軍歌の一つ「波瀾懐古」の一節を挙げれば、「ひと日ふた日は晴れたれど／三日四日五日は雨に風／路のあしさにのる駒も／ふみわずらいぬ野路山路／ここはいづこと尋ぬれば／戦い敗れしポーランド…以下略」は先ず下士官なり、上官が一節を歌い、あとを兵隊が続けて歌うのだが小学校しか出ていない兵士たちの多くは意味のわからないまま覚えさせられた。この曲は詩人で国文学者の落合直文の作と後で知ったが、小学校の唱歌で馴染の深い「桜井の別れ」も彼の作で、「青葉茂れる桜井の／里の渡りの夕まぐれ／木の下かげに駒とめて／世の行末をつくづくと／忍ぶ鎧の袖の上に／散るは涙かはた露か／正成涙をうち払い／わが子正行呼びよせて／父は兵庫におもむかむ／彼方の浦にて討死せむ／汝はここまで来れども…以下略」は子供の頃風呂で叔母がこの唄を歌い終るまで湯から出してもらえなかったことを懐しく思い出す。

この3月で定年退任の大正14年生れの中村璋八先生は四書・五経に通じた漢籍の泰斗でその多数の著書・論文や学外活動に、その学識の深さは学の蘊奥を極めたという言葉にふさわしい温和な人だった。われら明治と昭和に挟まれた大正生れの年齢順に竹下・細川・中村・小林・山縣さんらは誰一人として権謀術策に長けた学内政治というものには無縁であったことも共通していたが大正デカニズムと自由主義の洗礼を受けながらもあの悲惨な戦争に狩り出された最後の年代という共通した自覚があった。

願わくば山縣先生、ここ2・3年の内に充分休養して健康を取り戻したら是非坂本さんとも相談して大沢先生を誘って是非関西へ遊びに来て下さい。神戸の有馬温泉でも、南紀の白浜温泉でも皆で夜びいて、「妻をめとらば才たけて／みめうるわしくなさけある…」を歌い、また「空にさえざる鳥の声／峯より落

つる滝の音…」の「美しき天然」の曲が奏でるサーカスのジントの響に遠い昔に戻って大いに飲み、語り明そうではありませんか。お互が天国に召されない内に。私は神戸でその日の来るのを待っています。長い間御苦労さまでした。

文化人レミユエル・ガリヴァーの逢着地 あるいは 文化に対する類型

小 玉 齊 夫

(フランス語)

(1)

既に十五年以上も前になる、高橋 薫さんと共に勤務しはじめた駒沢の帰途の喫茶のあいま、時には故石井直志氏など非常勤の先生方も加わって他愛もない論議・談話にふけり、「厳冬の日の一瞬の陽だまり」とでも形容すべき愉楽のひとつきを娛しむ機会がしばしばあった。昨今、殆どそのような機会がない、ということは、当時は誰もが若く余裕があったということかもしれないが、その種の談論への意欲が今よりも遥かに強く大きかったと考えられなくもない。話題の赴くところ、おのずからフランスに於ける文芸・思潮の動向であって、或る種の議論に対し私は口をつぐむことを原則としてはいたが、多彩な知識の軽やかな展開は興味をそぐことありえず、おそらくその場の参加者には、灰色に塗りたくられた日常への回帰を促す、ひとつの要因にさえなっていた（ように、私には回想される）。

そんな風にこの種の「邂逅・交流」の意味を私は把捉していたが、時期的にもほぼ同じ頃、外国語部長であった山縣敏夫先生との、酒席であると否とを問わぬ言葉の交流の場面が、高橋さんとも共有される体験として幾度か実現されていたことは、今でも記憶にとどめおくべき事項のひとつとして私には意識さ

れつづけている。その山縣さんの退職に際して、ということになれば、私の内には、「さらなる交流を促す言辞の提出を敢えて試みよ」という想いがまたしても強迫観念のごとく膨れあがってくるのであって、とすれば殆ど必然的に

「細川幸夫：ドン・キホーテ(*)＝山縣敏夫： λ 」

という「比例式」に於ける λ を捻出すること、が私には要求されていると見なければならぬ(ようである)。

(*) ドン・キホーテとの対比については、過ぎし元旦、「褒められたのか、皮肉を言われたのか、未だにわからん(!)」旨の書き込みのある賀状を細川さんからいただいた。もちろん、皮肉を言ったりけなしたりするわけがありません。

幸いなことに、「問いが適切に立てられれば、解答は既に与えられたようなものだ」という或るフランスの哲学者の指摘どおり、上記比例式が直観されたその瞬間、私の恣意的な視野の内には、「全くとるに足らない虫けら」の如き小人たちの只中に漂着した巨人に山縣御大を比定することを通じて、ジョナサン・スウィフトの創造になるレミュエル・ガリヴァーが、 λ の実像として忽然とその姿を現わしてきた、のである。とはいえしかし、諷刺文学と規定された限りでの「ガリヴァー旅行記」は、叙述と叙述の背景にある事実(とされるもの)との[対応・対比]の究明、作者スウィフトによる[矮小化/誇大化]あるいは[揶揄/慨嘆]の在り様ならびにその根拠の探索が中心的な研究課題のようであって、「皇帝のクッション」は「ジョージ一世の愛妾ケンドル公爵夫人を諷している」(岩波文庫版、平井正穂訳注)のように、叙述の奥底に沈澱している歴史的「事実」への言及がここかしこで殆ど誇示されるが如く拳例されているのを眼にすると、作者スウィフトやその時代についてはもちろん、「ガリヴァー旅行記」に関わる必要最小限の知識も持たぬ(ダブリンにさえ行ったことのない)私には、新たに付け加えるべき何ものもないという空虚な想いに駆られてしまう。私が、したがって、試み得るのは、可能であれば上の λ を満たすべきガリヴァーの何らかの特性を摘出してみること、そのための私的

な一二の観点を提示すること、といった些細な企てにならざるを得ない。もとより、上の比例式じたい、厳密に言えば、「外項の積は内項の積」云々によって、「細川幸夫×ガリヴァー＝山縣敏夫×ドン・キホーテ」が成立することになり、何だこれは、両者の体重に関する変換公式か？などと、誤解されかねず、もう、わけが分からなくなるので、まあ、無用な科学的(?)詮索は、おやめ下さい…

(2)

①『ガリヴァー旅行記』より9年早く1719年に刊行され既に名声を得ていた『ロビンソン・クルーソー』を対照の例に採れば、その主人公の特性は、既に指摘されていようが、(a)「自然に帰れ」云々というルソーの思想(『エミール』)のひとつの体現例として(b)人間の原始的経済活動のひとつの実践例として、というふたつの側面から主として言及されてきたようである。後代になるとロビンソンに倣ったさまざまな物語が種々雑多な[機能・様態]を付されて発表されるに到り、それら「ロビンソン変形譚」の詳細はグリーン著『ロビンソン・クルーソー物語』(みすず書房)に詳しいが、ついでのことながら、同書訳者岩尾龍太郎氏によるRobinsonade(ドイツ語)の語義解説は、些末なことながら、クロード・レヴィ＝ストロース『野性の思考』(みすず書房)の訳注で言及されるrobinsonnade(こちらはフランス語)の説明と合致するところ、甚だ少ない。ロビンソン物語に関しては岩尾氏の指摘の方が妥当と思われるが、しかしことは「訳注」だけの問題ではないのかもしれない。ともあれ、オリノコ河付近の孤島から帰還後のロビンソンが『その後の冒険』としてまとめられるアフリカ・インド・中国等への旅も敢行していることからすれば、そして、漂泊への想いやまぬ<行動人>というこの種の物語の成立根拠を重視すれば、『ロビンソン・クルーソー』を単なる奇譚・冒険譚と受け取ることも不可能なわけではあるまい。だがしかし孤島のロビンソンを特徴づけているのは、やはり、誠実な<工作人>・<経済人>としての生活と言うべきであって、これと対比するなら、同じく珍奇な冒険譚の主人公であるガリヴァーの物語は、<文

化人>とでも言うべき生の在り様を展開しているのではないか、というのが私の提示する最初の観点ということになる。

もちろん、ここで言う<文化人>は、ガリヴァーがケンブリッジ大学に学びライデン大学では医学を修めたという意味での、いわゆる教養人を指すのではない。<工人>・<経済人>が、自然に立ち向かいこれに原始的生産活動としての経済的働きかけを行った、という意味で用いられているのに範を取るなら、ガリヴァーの<文化人>は、「異なる文化に直面し、文化的な対立・衝突の現場で、異なる文化に対する真摯な対応を自ら選びと（らざるを得なか）った」、そういう意味での<文化人>を指している。そして、そのような在り様を可能にしたガリヴァーの特性は、(a) 他者の追従を許さぬ耳のちから、聴覚の鋭敏さ、(b) 卓越した言語能力、そしてそれを契機としての (c) 優れた文化的差異の把握力、に求められるようである。

②孤島のロビンソンといえども、なるほど言語音声への執着意識が希薄なわけではなく、鸚鵡の叫びに思わず目覚める場面は自然の雑音(?)のみに囲まれていたロビンソンの孤独な姿を彷彿とさせるが、「お前はどこにいるのだ、どうしてお前はここに来たのだ」と響いてくる鸚鵡のその「言葉」は、「鸚鵡にものをいうことを教えた」(新潮文庫版、吉田健一訳)のである以上、ロビンソン(あるいは作者デフォー)の母語としての英語表現であらざるを得ず、そしてまた、今度は鳥ではなく人間に「話し掛けて、彼に言葉を教え始めた。先ず私は彼に、彼をフライデーと呼ぶことにするということを教え込んだ」時のロビンソンの言語活動は、あたかも大英帝国の植民地経営者もしくは伝道に携わるキリスト教宣教師の如くであって、英語を教えることで「優れた」イギリス文化を伝播するという使命感に溢れたものとして展開されているように見られる。少なくとも言語を対象化する時、作者デフォーは英語を中心に置いて他者を教化すること以外には考慮が及ばなかったのではないのか。あるいは、英語に基づく文化を外部に広めること以外の[感覚・方向・意義]は[表現・了解]し得なかったのではないのか(*)。「それから私は彼にマスター(主人)と

言うことを教え、私のことをそう呼ぶようにさせた。又イエスとノーという言葉と、その意味を教えた」、あるいは「聖書を読むことだけで、この野蛮人に光明を与えることを得て、彼を私が知っているどんな人にも劣らない、立派なキリスト教徒にすることが出来た」云々。

③これに対してガリヴァーは如何と云えば、彼の物語じたいが非現実的な土地に於ける非現実的な体験を強調するものであるがゆえに、自身の母語である英語を教えこむような強制的能動性は少しも見出されず、むしろ（当時の世界の文化的情勢からすれば例外と言わざるを得ないのだが）ひたすら言うならば受動的に、逢着した非現実的な島々（国々）で話されている非現実的な言語の習得にみずから励みつつけている。非現実的な物語の現実性を示すためには、その島（国）の言語の現実性を示さなければならないが、この設定を可能とするためには、つまりは物語の成立を確実にするためには、聞いたこともない言語音声をも的確に把握する鋭敏な聴覚を主人公ガリヴァーに備えさせなければならないし、短時日で未知の言葉に習熟してしまうほどの豊かな言語的才能を付与させなければならない。＜文化人＞ガリヴァーは、したがってまず最初には＜言語人＞としての相貌を明らかにしてやることになる。

（*）たとえば、ラファエル・ヒスロデイは、「異邦人は (...) 案内を受けないかぎり (...) 入ってくることはまず不可能」である国の「土地・河川・都市・人民・風俗・法令・法律など」について諄々と説き明かしている（トマス・モア『ユートピア』、岩波文庫版、平井正穂訳）が、言語については如何かというと、(a)「彼らは学問を母国語で教わる。言葉が豊富で、耳に快いし、それに考えを表現するのにもっとも完全で危気がないからである。(...)他の国人の言葉よりも遥かに洗煉され、純化されている」(b)「その言葉は、他のあらゆる点では多分にペルシア語に似ているが、都市名や役名などではギリシア語の面影をかなり留めている」といった報告に尽きており、何語（ラテン語？）で彼らと交流し得たのか、些か不明である。ロビンソン同様、ラファエル・ヒスロデイも、自身の

言語環境に安住していて、理想郷での（理想的と思われる）言葉を自分のものにしようという姿勢は認められない。かえって「私がギリシアの文学や学問の話しをしていた時」、ユートピアの住民の方が「ギリシアの言葉と学問を自分たちに教えてくれないか」と頼んでくる有様であって、ガリヴァーに先立つこと二百年であればやむを得ないことではあるが、「自国語・自文化」中心主義はやはり鮮明と言わざるを得ない。

(3)

①リリパットに於けるガリヴァーの聴覚は「中に一人勇敢なのがいて、私の顔がすっかり見渡せる近くまでやってくると、いかにも驚いたといった調子で、両手を挙げ空を仰いで、甲高いがはっきりした声で、「ヘキナ・ディーガル」と叫んだ。他の者たちも、同じ言葉を数回繰り返して叫んだ。もちろん、どういう意味なのか、その時には分かるはずもなかった」というように、地面に転がされ捕縛されたままの状況下であっても的確にその音声を捉え得ている。他にも「トルゴ・フォナック」「ラングロ・デフル・サン」「ハーゴ」「ボラック・ミヴォラ」「ペプロム・セラン」等々がリリパット人の言葉として記録されているが、これらの音声が、「多少とも聞きかじっていた言語という言語を使って彼らに話しかけてみた。といっても要するに、高地ドイツ語、低地ドイツ語、ラテン語、フランス語、スペイン語、イタリア語、それにいわゆる混成語（これだけでも十分<言語人>の資格を有している！）で話したのだが、どれもこれも相手に通じなかった」という時期であったにもかかわらず、ガリヴァーによってローマ字への書き写しが可能な程度までに聴き取られたことは、まさに驚異的と言わねばなるまい。初めて聞いた、意味も理解し得ぬ言語の音声を、明確に「聴き取り・記憶し・記録（書き取り）する」ことは、一般的には殆ど不可能だからである。

作者スウィフトがガリヴァーの冒険の物語を危うく、あるいは辛うじて成立させている、その象徴的な契機がガリヴァーのこの言語能力と言える。リリパットの存在が虚構であるのは当然として、その虚構を現実的虚構として構成し

現実的虚構として理解させるためには、ガリヴァーに特異な能力（ここでは言語についての）を仮託する以外に方法がなかったのであり、架空の土地での架空の出来事に現実性を与えるために、「キングズイングリッシュ」からすれば無茶苦茶な分節音を考案し提出することは物語の成立の上で絶対に必要な要請であった。（宗教的な在り様の重視も含めて）〈経済人〉としての現実的な生活の描写が主調を構成する「ロビンソン」が、植民地住民に対するかの如き事実性に近い状況を描いているのと比較する観点に立つなら、「ガリヴァー旅行記」は、[現実・事実]に関わる方向ではまったく逆に、虚構の[時間・空間]に於ける言語の虚構性を明示するために、虚構の音声じたいを正確にかつ克明に描写せざるを得なかったのである。

②そして、ことは「途方もなく巨大な人間」たちが住むプロブディンナグに於いても同様であって、「水車の音みたい」に「耳もとでごうごうと響く」（ここでは小人としての）ガリヴァーが初めて聞くその「言葉そのものは実ははっきりとしていた」。最初のうちこそ「お互いに何を言い合っているのかさっぱり分らなかった」ので身振り手ぶりの会話が交されるが、やがて「グラムダルクリッチ」から教わった「相手の言葉を用いて、ご機嫌はいかがですか、とか、よくいらっしやいました、などと喋ったり」することも出来るようになり、さらに「人体そっくり、しかも多少言葉も喋れるし、面白い芸当も数々できる」ため見世物に出されるガリヴァーは、「こんなちっぽけな動物がどうしてこんなに知恵と思慮に富んだことが言えるのか、とひどく（王妃に）びっくりされ」珍重されるほど、依然として優れた言語能力の持ち主として示されつづける。作者スウィフトが「喋り方に外国人特有のアクセントがはいり、まだ未熟なために言葉が自由に操れず、それに農夫の家で覚え込んでしまった、それこそ宮廷の上品な話し方とは似ても似つかぬ、ぞんざいな言葉がちょいちょい出てくる、という欠点」をことさら取り上げるのも、かえってガリヴァーの達者な適応能力を強調するため、非現実的な現実に常識的な在り様を付け加えることでその非現実性をいくらかなりとも修正するため、と解し得る。事実、「三人の

碩学」と緻密な議論をしたり、宮廷の侏儒に対し「当意即妙の言葉を口にして、やりかえした」りするガリヴァー像が直ちに示されると、「欠点」の提示じたい既に蛇足と化していることが了解されるのであり、習熟したプロブディンナグ語の実例も「グリルドリッグ」「グラルトラド」「スラードラル」「スプラクナック」「ロアブラルグラッド」等々、なるほど日常の英語発音からすれば、なかなか把握・記憶不可能な音声の集積と言わざるを得ない。

③さらに、新たな冒険の旅の逢着地である「空中に浮遊」したラピュータ島に於いても、「懸命に勉強したおかげで、この国の言葉の習得も大いに進歩」するガリヴァーであるが、彼の言語能力の叙述に対応するかのよう、ラピュータ島の「外界」にあたるバルニバービ島では、「言語研究所」に拠る学者たちが科学的な(?)言語把握の試みを展開しており、統計学的傾向性の研究に従事する彼らの真摯な姿は、非現実を彷徨するガリヴァーの旅行譚の中でもその非現実性の描写の白眉と認めざるを得ない。偶然によって意味のある文が生成されることへの淡い期待は、偶然に於いて成立する物語の在り様の象徴的な画像かもしれないが、しかし同時に、逢着先の言語を習得しようとするガリヴァーの試みの方がよりまともな努力に基づいていることをも暗示し、かえって彼の言語能力の現実性を強調しているようでもある。すなわち「この国の言葉のすべての単語が、それもいろんな叙法、時制、語尾変化等を示す単語にいたるまですべて書きつけられ、それらが順序にはお構いなしに列べられてい」る、そういう機械を動かすと「単語のすべての配列は完全に変し」「その単語のうちの一つが文章の一部となるような順序にまとま」るので、それらを筆記し「繋ぎ合わせて、山のような資料を集め、これをもとにしてすべての技術と学問に関する完全な百科全書を世間に提供」しようという試みが、それじたい諷刺としか言いようもない (a) 名詞の多用、あるいは言葉の代わりの (b) 「物」の利用、というふたつの「言語の改善」案、あるいは普遍的言語への関心などととも、言及されるのである。

④そしてまた、「妖術や魔法使いの島」の意とされるダラブダブドリップに到着したガリヴァーの非現実との交流は、これは言語の背景あるいは延長としての文化とも関わってくるが、先のラピュータ島での言語探索が空間的（配列）移動であるとするれば、今度は、古代への時間的な遡行として展開されるに到る。となれば、ダブリンのセント・パトリック大聖堂主任司祭（である作者スウィフト）が舞い戻るのは、当時の英国知識人の教養に基づくなら殆ど必然的に、ギリシャ・ローマ世界であらざるを得ない。自身のギリシャ語の貧弱さを嘆きつつ、しかし我らがガリヴァーは「魔法使い」によって現実世界に呼び戻されたアレクサンダー大帝（！）と話し合いシーザーやブルータスとも会話に励み、さらにはホメロス、アリストテレス、そしてデカルト、ガッサンディとも言葉を交す等々、ここでも、古代の話し相手の発する言葉よりは、ガリヴァー自身の教養に基づく語学能力が重要かつ記憶に残るものとして、ひたすら叙述されつづけている。

⑤とはいえ、当時の英国知識人にとってもいささか疎遠な日本語との現実的な交流のためには、さすがのガリヴァーも通訳（による翻訳）に頼らざるをえない。「日本の南東部にある小さな港町で、ザモスキというところに上陸した」彼は、低地オランダ語によって「踏絵」に関わる恩恵を受けられるよう通訳に懇願したりもするが、しかし総じて日本についての言及は、当然のことながら、文化的な辺境性あるいはエキゾティズムの提示にとどまり、ただ、物語に現実性を帯びさせるための配慮が一貫してなされていることが注目されるにとどまる。鋭敏な聴覚を持つガリヴァーではあるが、日本語音声の真似を試みるというような「暴拳」は、やはりここでは周到に敬遠された、というように。

⑥これに対し「馬の国」であるフイヌムに於いては、それじたい十分に非現実的な空間に於ける行動のゆえに、かえって、言葉の習得の様子は再び仔細に表現されることになる。「食事をしながら、主人は、燕麦、牛乳、火、水等々を表わす言葉を教えてくれ、私は彼のあとに続いてすらすらと発音してみせた。

若い時から語学はお手のものだったからだ」。実際、「私がおっぱら努力したことは、言葉の習得であった」で始まる『フウイヌム国渡航記』第三章には、「彼らの喋り方は、鼻と喉を使って発音するといったやり方である。彼らの言葉は、ヨーロッパの言語の中で、私の知っている限りでは、高地ドイツ語に一番近いが、実際にはもっと優雅で表現力に富んでいる。皇帝チャールズ五世が、もしわたしが馬に話しかけるとしたら高地ドイツ語を用いるつもりだ、と言ったそうだが、まさに私の意見と一致したというべきであろう」というような（作者スウィフトを想起させる）皮肉な観察も記されているが、ガリヴァーのフウイヌム体験は、（ヒトと馬との違いを「種の相違」と名付けるとすれば）「種の相違」に基づいた「言語・存在」の異なった在り様を叙述することをおして、「文化—内—存在」である我々が眼にし得るさまざまな文化の差異の様相を端的に明示する意図が窺われる。フウイヌムで用いられている言語は、彼らから「ヤプー」と呼ばれる「われわれ」（＝人間^(*)）の言葉と比べて、(a)「嘘を言うとか虚偽とかいう意味を表わす言葉が、彼らの言語にはなかった」(b)「彼らの言語には語彙が余り多くなかった」が、「それというのも、われわれに比べて欲求や感情がずっと少ないせいであった」(c)「権力や政府や戦争や法律や処罰等々、といったものを表わす適当な言葉が、この国の言語にはなかった」など、要するに「表現・了解」のひとつの根拠である語彙がフウイヌムには不足しているとされており、語彙のこの欠如は、言語の欠陥というよりもむしろ、文化的な画然とした異質性の提示と認められるのである。

(*) 奇書『家畜人ヤプー』の著者の（1970年7月の）「あとがき」には、
『ガリヴァーの旅』とサドの『アリーヌとヴァルクール』への言及がある。

一般的に言って、ふたつの言語間に「該当する語彙が無い」という事態は、ふたつの言葉の背景として在るふたつの文化の間に在る何らかの差異を表わすものと理解されるようである。「甘える」という語彙（[修辞・思考]）が日本語にはあるが他の西欧言語には無い（事実か？）がゆえに、「甘える」のは日

本人の特徴的心性である（事実か？）という推論がなされたのはその一例であるが、語彙の不在そのものが文化の差異を引き出す端緒・契機であることは、確かに、否定し難い一側面を照射していると言わざるを得ない。言葉によって指示された物の存在を言葉は含み込んでいるという前提に立つならば、そしてまた翻訳不可能な語彙・表現の存在を無視し難いのであるならば、文化の差異の在り様は該当する「語彙の不在」をひとつの先鋭なあるいは鋭敏な「リトマス紙」としているように見受けられるからである。

「権力や戦争や政府」等々の不在の諸語彙が示すに到るフウイヌムを舞台としての〔言語・文化〕の〔差異・連関〕の様相をここで繰り返す余裕はないが、作者スウィフトが言葉と現実との対応の契機に「欲求や感情がずっと少ない」点を挙げているのは、はからずも英国「経験論」の土壌をここに於いても確認していると見るべきなのであろうか。

(4)

①ノルベルト・エリアスは、ドイツに於ける文化観念の生成に関連し、宮廷でのいわゆる *courtoisie* との関連から「理性的な自己統禦」が強調された時期があったことも指摘している（仏訳本：*La Civilisation des mœurs*）。要するに、ひとつの国民の内部に於いても、「粗野な振る舞い」に対する「洗練された物腰」というような、日常生活上の身の処し方に関わる差異の標識として文化があった、ということであるが、これを（現在の語意に当てはめて）異なる「複数の文化」間での「差異の標識」としてみるならば、ひとつひとつの文化を文化として認めるか否かの判別がおのずから要求されることになり、しかもその判別の際には、自身が向かい合う文化が、自身が包み込まれている（ていた）文化と比較して「より優れた文化であるか、より劣った文化であるか」という認定を殆ど必然とするような、非論理的あるいは感情的な要素も含めた文化観が既にその地層を形成している、或る意味ではレヴィ＝ストロース以前のそのような見方（とまとめてよいのだろうか？）を、（批判的に）考慮に容れなけ

ればならないということになる。

ところで、物語上の要請を無視できないとはいえ、漂着するどの島もひとつの国を形成しているように構想せざるを得なかったことは、「島国」に住む英国人作者スウィフトの文化意識のおのずからなる反映のように思われるが、ガリヴァー自身が遭遇した「島々」の文化も、理性的な分析・批判の対象とする以前に、まずは、自身がこれまで包み込まれていた文化との相関に於いておのずから現われ出てくる（だからこそ諷刺が成立する）ものと把握されるのであり、そこにこそ、作者スウィフトの文化的な現実に対する見方が反映されていると見るべきであろう。作者スウィフトが個々の島の文化を文化として認めるか否かという判別を避け、それ以上に踏み込まないのは、確かにそれぞれの島の文化を無前提に文化として認めるのでなければ非現実的な物語が成立しないからであるが、そのためにこそかえって、ガリヴァーという〈文化人〉の応対が、まるで初めから文化に遭遇あるいは関与する際の方法的な厳密性を確立していたかのように、さまざまな文化に向かい合う際の「基本的な反応類型」を〈翻訳〉することになり得た、というのが私の提示する第二の観点になる。

②自身の身体が発散する（想像上の）空間的ちからは、向かいあう対象との空間的な大小の対比に応じておのずから〔優越感／劣等感〕という対照的な感情的根拠に基づく反応をもたらすようであり、したがって、漂着した小人国リリパットと巨人国ブロブディンナグとでは、おのずから二様の異なった応対をガリヴァーは課せられることになる。

リリパットに於いて、自身が巨人であるガリヴァーが「住民」の「一種の毅然たる態度」を尊重し、むやみに力に訴えることを自制し得たのは、自身の〈(身体) 存在感覚〉に基づく(小人である)リリパット人に対する自信を、根底では持ちつづけられ得たからであろう。もちろん、計測するまでもなく、つまりは合理的・分析的思考とは無縁に、あまりにも自明な身体の大小の差異の知覚によっておのずから沸き上がってくる〈(身体) 存在感覚〉は、おそらく単純な優越感のみで構成されているのではなく、〈(身体) 存在〉に絡まる一般

性・共通性として認識され得るさまざまな要素の複合としても把捉されるはずである。たとえば「私が逃げるのはもう不可能だと見てとった職人たちは、私の体を縛りつけていた紐を全部断ち切った。早速、私は立ち上がって見たものの、未だかつて感じたこともないようなうら悲しい思いに襲われた」とガリヴァーが述べる時、一瞬前にガリヴァーが感じていた《(身体) 存在》に絡まる僅かとはいえそれなりの「優越感」は、その[感覚・方向・意義]を修正すべきもの、反対の[感覚・方向・意義]を有するものとしてガリヴァーみずからによって捉えかえされたと言わねばならない。「反対の」というこの否定性こそが、より一般的な、[小人・巨人]に関わる通奏低音とでも言うべき共通性へと道を開くはずであり、それが個別性・特殊性を訴える諸文化間の公共性につながっていくはずであるが、しかし極めて文学的なこの「うら悲しい思い」について、作者スウィフトはこの後のガリヴァーに何も語らせてはいない。

リリパット人に対するガリヴァーの、身体的要因に基づく心理的な余裕は、宮廷の火事の際に、作者スウィフトがトーマス・モアとともに愛読していたというラプレー (Howard Erskine-Hill, *Swift, Gulliver's Travels*, Cambridge University Press)描くところの「ガルガンチュア」的行為をとらせることになるが、この事件に典型的に見出される行動の在り様を敢えて文化的な理解の範型に置きかえてみるなら、リリパットの巨人ガリヴァーは「自身の文化の優越性を感じつつ上から相手の文化に向かい合う型」を代表していると考えられる。

③とすれば、ガリヴァーが小人となるブロブディンナグに於ける状況は、リリパットとはまったく逆の[感覚・方向・意義]に於ける[表現・了解]がなされていると見なければなるまい。「私はあそこ(＝リリパット)の住人たちからは、この世界では空前絶後の奇怪な巨人だと見做されていた。片手で全艦隊を引っばることもできたし(...)あの国の歴史には永久に記される(*)にきまっている、その他のさまざまな偉業もなしとげたものであった。それが今、この巨人(＝ブロブディンナグ人)族の間に紛れ込んで、全くとるに足らない虫けらのように見做されるとすれば、それこそ何たる屈辱であろうか...」

(*) リリパットに於ける囚われのガリヴァーの描写は、江戸期の絵師たちが南蛮渡来の巨大で奇態な動物である象や駱駝に対して、採寸した数字とともに残した画像、それを描いていた時の彼らの心理的反応を想い起こさせる。

ともあれ、「巨人がいつなんどき私を地面に叩きつけるかわかったものではない」と思い、戦々兢兢としていた」状態の下では、文化の領域に於いても「相手の文化の優越性に圧倒され、自身の文化の劣等性に苛まれる型」という対応をガリヴァーは体現せざるを得ない。ガリヴァーの「道理に適った」説明も「なかなか言うではないか」と軽く受けとめられるだけであり、最初は巨人たちの無理解を憤慨していたガリヴァー自身も、時とともに、単なる「規模の違い」だけで「祖国」の「風俗習慣、宗教、法律、政治、学問」等のさまざまな活動が「微苦笑を禁じ得ない」滑稽なことがらのように思われてきさえする。ガリヴァーの劣等意識は、猿（「種の相違」！）に抱かれたのをプロブディンナグの人々に目撃され、自分の国でなら「あんな猿を相手にするくらい朝飯前だ」と言い放って大笑いされる場面でその頂点に達する。「人間はどんなに面目を保とうとしても、相手が自分とは比較にならないくらいけたはずれの人間である場合には、そんなことはてんで問題にならないということを、私はしみじみ感じ」てしまうのだ。

法律や政治制度についてガリヴァーが試みる説明もプロブディンナグの国王から嘲笑と軽蔑で迎えられるのは、もちろん作者スウィフトの英国の現実に対する諷刺の描写のゆえではあるが、自身がそれに包み込まれていた文化に向かい合う際の理解の範型に注目すれば、ガリヴァーが「自分の心から愛する、そして世界に冠たる祖国がさんざんに馬鹿にされても、その間はじっと歯を食いしばって我慢しているより他はなかった」のは、他人への説明に自身が用いた理想的な言辞が、しかし実際には「祖国」の「現実」によって惨めに裏切られていることを、説明の過程で自分自身によって知らされてしまうからにほかならない。「他国民の風俗習慣に対する無知は、必然的に多くの「偏見」と、あ

る種の「狭い了簡」を、生み出す」という指摘も、ガリヴァーによる自分自身の文化環境に対する述懐のようであり、「この国の人々の学問は、ただ道德、歴史、詩、数学の諸学科からなり、いかにも不十分なものであった」という批判も、プロブディンナグ国の欠陥を指すというよりはむしろ、自身の文化環境から逸れているガリヴァーが自己を慰めるための達観めいた観察のように聞こえてくるのである。

④それ以外の島々に逢着した際のガリヴァーの文化的遭遇には、ことさらなる[優越感／劣等感]の二極分離は認められず、異質性に基づく不可解な在り様それじたいに対し、感情的反応には達しない領域（いわば論理的次元）に於ける素直な実情の報告が描かれているようである。その典型は「馬の国」フウイヌムでの応対であるが、ヒトと馬との「種の相違」は確かに同一化するにはあまりにも[自／他]の乖離が大きいゆえに、ここでは不可解が不可解としてのみ記憶・記録され、新たな解逅の際に見出されるべき感動あるいは不満は途中で消去されたままにとどまっている。不可解が単にあるいは純粹に不可解で在り続けるためには、そして非現実性への感情的な[不安・不快・不信]が発生しないためには、表現はひたすら事物・事態の空間的な並置に終始せざるを得ないはずであり、ひとたび何らかの物語が発生し、時間的な経過に応じて話の筋が展開されるに到れば、この種の不可解に対する意識が感情的な要因へと傾斜するのを拒み切るのはそれほど容易なことではない。そして当然想定される如く、多くの場合文化的遭遇は「何らかの物語の発生」に到らざるを得ないのであって、とすればその文化的類型は、敢えて探るならば「不可解に遭遇してそれを理解できず、眼前の出来事にただ驚愕・憤慨する」「不思議の国のアリス」のような対応あるいは反応を呈することになるようである。

- I 自身の文化の優越性を感じつつ上から相手の文化に向かい合う型
- II 相手の文化の優越性に圧倒され、自身の文化の劣等性に苛まれる型
- III 相手の文化を理解できず、眼前の出来事に呆然自失する型あるいは翻

弄され憤慨する型

[優越感・劣等感・不可解] という上の類型それじたいは極めて陳腐な、言及するに値しない弁別でもあるが、『ガリヴァー旅行記』に於いて他の国々の諸文化に対する反応類型が（おそらくは無意識的に）提示されていることを認めるならば、18世紀以降、西欧文化の担い手が対外的な進出先に於いて示す「文化的意識」の形態、あるいは西欧文化に対峙することを強いられた側の「文化的意識」の形態に関わる叙述に於いて、きわめて大まかながら、ひとつの基本的な枠組み・類型が与えられていると判断することも可能なようである。

(5)

①一般的に言って、類型化の作業は無内容あるいは相互に矛盾する「ステレオタイプ」の採集に結果してしまいがちであるが、にもかかわらず、文化について語る時にこの種のステレオタイプ化を免れるのは、文化が国籍あるいは民族と連動している限り極めて困難なようである。

たとえば、フランス人は法 (le droit) に基づく「思考の人」であるがイギリス人はフェアプレー (fairplay) に基づく「行動の人」である、というような典型的な類型化 (S. マダリアーガ『情熱の構造』、佐々木孝訳、れんが書房新社) を眼にすると、ロビンソンやガリヴァーなど小説の主人公にさえ「行動の人」の果敢な例を見出すことが出来るのだから、イギリスに於ける実例もさぞかし多いことであろうと思い、反対例を即座に挙げる事が出来ないことも手伝って、ついなるほどと納得してしまうことになる。そして、少数の例外を思いついたとたん、何やら落ち着かぬ想いで上の規定を思い浮かべ、あらゆる文化的なステレオタイプは、一般性を装っているものの個人の主観的な体験に基づく一方的な思い込みに過ぎないのではないか、と反撥したくなるものである。

けれども、もともと「文化の類型化」の成立には、国籍のような何らかの基準によって範囲を定められた該当者すべてに当てはまるのではなく、少数の例外存在をつねに許容するという前提があるはずである。全称判断、特称判断等

の峻別はここでは意味をなさないものであり、だからこそ、「イギリス人の中にも非活動的で沈思黙考・懷疑逡巡・躊躇懊悩する者がいる」と言いたてても、上の類型化を正しく否定したことにはならない。我々がステレオタイプに基づいて、あるいはステレオタイプそのものについて話している時は、バルニバービ島の「言語研究所」に拠る学者たちの研究対象のように、統計学的傾向性の概念としてしか、文化的な類型化を認めていないのであり、そういうものとしてしか存在し得ないものと考えているからである。

ステレオタイプが許容されるのは、例外じたいもステレオタイプと見ざるを得ない現実のちからのゆえであるが、ところで、ひとたび或る見方がそれじたい正しいか否かの吟味を経ずにひとつの類型として広まってしまうと、「ガリヴァーは行動の人である」と言うのも新たな意味づけを企てたことにはならず、むしろ固定化された知識の繰り返しとして常套句の羅列を果たすだけになる。私の「ガリヴァー＝文化人」説も「ガリヴァー＝行動の人」と同様で、何かを付け加えたことにはならないのだろうが、しかし山縣先生の「言葉の交流」との関連で言えば、少なくとも個人的には、新たな場面を切開いたような想いに撃たれていないわけでもない。

②山縣さんの言葉は、一般的に通用している観念の範囲を超えたところでの交流を求めている。これは言葉に対する世代的な差異の現われかもしれないのだが、たとえば先に引用したマダリアーガは上掲書でイギリスについてもうひとつ別の類型化も行っている。「イギリスでは、仕事に手をつける際、他の人々を納得させたり彼らと一致せずに自分の意見にしがみつく人は pig-headed つまり豚の頭を持った人間とみなされる（事実か?）。このとてつもない中傷は、一般のイギリス人にとって、一つの意見を守ろうと一生懸命になれるのは豚だけだということから来ている。」言われてあたりを見回してみると、なるほど我々も島国に棲息しているせいか、イギリス同様(*)ここかしこに豚面が徘徊しておるわい、という想いに駆られないでもない。だが冷静に思いかえせば、要するに言わんとするところは、むやみに自説を主張しつづけることなく相手

の説を尊重しあうことこそが、「閉ざされた空間」内の住民にとっては必要欠くべからざる「生活の知恵」であり、したがってそれに楯突くものは洋の東西を問わず(1)指弾され(ここでは)豚扱いされる、ということなのだ。

(*) “N’oubliez pas que la France est une diversité.(...) N’oubliez pas que l’Angleterre est une île.” (Fernand Braudel: *L’Identité de la France* に引用。あえてフランス語のままにしておきます。)

ところでアンドレ・モロワが「スペイン人のなかでも最もデカルト的」と(些かステレオタイプ的に)評価したというマダリアーガは、しかしさらに続けて、「フランスでは、自分に任されたものがどのような方法によって為されてもよいというつもりで自分の意見を捨てる人は、疑惑の対象となる(事実か?)。なぜならフランス人にとって意見は、もっとも貴重な善だからである」という比較も提示している。このような、マダリアーガによって摘出された英仏二国の文化的な在り様は、文化の類型化の結果としてのふたつの方向性を表わしている。つまり「相手との心の交流を尊重しあう世界」はイギリス風になり、「独立した個人どうしが自身の言葉の主張を行う世界」はフランス風になる、というように。しかしその方向性が、仮に共同体的な(あるいは個人的な)選択の結果として考えられ得る(事実か?)とすれば、文化の類型化の生成についても言及していることになる。「個人が自身の言葉を認めさせようと角突き合う世界」が厭ならばそれに応じた社会になり、「ムラの付き合いのようなマアマアの交流の世界」が厭ならばそれに応じた社会になる、というように。

「山縣さんの言葉は一般的な通用範囲を超えたところでの交流を求めている」という時、私が想うのは上の「ふたつの方向性」を超えた領域での言葉の交流の可能性である。「超える」という[修辞・思考]は、「言うは易く行うは難し」の実例そのものであるにもかかわらず極めて安易に利用される語彙であることは承知しているが、ここでは、先の[イギリス風/フランス風]の在り様の[調停・仲介]をするための[修辞・思考]と考えてみたい。あるいは異なった言語間の交流の際に要求される<翻訳>作業の働きに類推させてみたい。

社会の「文化的意識」はその一例であるが、或る共同体内部でそれなりの一般性を獲得してきた〔感覚・方向・意義〕に対し、個人の主張が、その翻訳作業以上の創作のちからを発揮するのは、実際にはなかなか困難である。一般性を獲得している〔感覚・方向・意義〕を変貌させるためには、おそらく実際には、〔予測し難い・さまざまな出来事の交互・相関作用の結果〕がなくては不可能なのであって、とすれば個々人がなし得るのは、翻訳の流れに近づきつつ、自身の〔修辞・思考〕を構成員との交流に従わせる程度のことではない。

山縣さんの言葉は、おのずから〔イギリス風／フランス風〕の域を超えた、いわばその両方向への傾斜が可能な稜線上での発言ということも出来るし、それがガリヴァーと交錯し得るのは、(ジョナサン・スウィフトではなく)山縣さんの〔矮小化／誇大化〕あるいは〔揶揄／慨嘆〕が、辛辣な諷刺であるよりはむしろ穏やかな諧謔そのものに向かう方向性をとっているからである。事実、酒席で山縣さんの冗談が連発される時、交流は言葉じたいの生成そのものにおいてこそ在る、という事実の温かみを我々は直かに知らされるのであって、この事態は、少しく深刻な議論の場面でもまったく同様であり、先に「世代的な差異の現われ」と述べた点もここに関連してくるのだろうが、言葉の垂直的な重みじたいが水平方向の交流を訴えるものとして在りつづけるという事実を、我々はまさに直接に知らされるのである。

そんな印象を、私は山縣さんの druide 風あるいは長老風の容貌を思い浮かべながら、つねに持ってしまうのである。

(1996年5月5日)